新宗連スローガン
信教の自由を守ろう
信仰心を広めよう
宗教協力を進めよう
世界の平和に貢献しよう

新宗教新聞

2024年（令和6年）
8月29日
第1148号

発行所
新日本宗教団体連合会
（略称 新宗連）
〒151-0053
東京都渋谷区代々木5丁目57番10号
電話（03）3468－5551（代表）
（03）3468－5588（編集）
大阪事務所 〒550-0006
大阪市西区江之子島1丁目8番21号111
電話（06）6443－7178

第59回 8.14式典

絶対非戦、平和実現へ決意

「すべてのいのちを尊ぶ世界」の実現を

新宗連青年会連合

新日本宗教青年会連盟（新宗連青年会、宮本泰克委員長）は8月14日午後6時から、東京都千代田区の国立・千鳥ケ淵戦没者墓苑で「第59回戦争犠牲者慰霊並びに平和祈願式典（8・14式典）」（『栞』参照）を開催し、新日本宗教団体連合会（新宗連、石倉寿一理事長）の加盟教団代表をはじめ、会員、信徒ら約400人が参列。式典の模様はインターネットの動画共有サイトでライブ配信された。（6面に各あいさつ、平和へのメッセージ－全文－を掲載）

アジア青年平和使節団 体験を経て実践を誓う

式典は午後6時、司会者から開式が告げられた後、4教団の青年代表者4人による献灯と献鶴が行われた。宮本泰克新宗連青年会委員長（妙智會教団代表役員）が灯を捧げ、主催者を代表してあいさつを述べた。

宮本委員長は第1次の派遣から半世紀を迎え、今年3月に派遣した第28次「アジア青年平和使節団（アジア懺悔行）」について言及。第1次使節団（1974年）が戦争犠牲者慰霊のために建立したタイ式供養塔（サンプラプーン）前で開催した慰霊供養の式典を通じ、「絶対非戦」の精神を胸に刻み、世界の恒久平和と「すべてのいのちを尊ぶ世界」の実現に向けた行動を再考する契機になったと振り返った。

また、「ユースフォーラム2024」において主題とした、詩人・宮沢賢治の言葉「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」との思いも改めて深く共感したことを述懐。さらに、能登半島地震のボランティア派遣についても触れ、「宗教青年が先頭に立ち、いまできることを行動し、続けていくことで人と人との繋がりが生まれ、それが真の世界平和実現の懸け橋になる」と強調した。

この後、教団別礼拝が行われた。解脱会、円応教、救世真教、思親会、松緑神道大和山、崇教眞光、善隣教、大和教団、玉光神社、福聚の会、妙智會教団、立正佼成会、大慧會教団の代表者がそれぞれ祈りを捧げ、戦争犠牲者に哀悼の意を表した。

続いて、加盟教団の青年を代表し立正佼成会の鈴木杏友沙さん（20）が「平和へのメッセージ」を発表した。中学生の頃から平和について深く考える機会が多く、戦争を経験した曾祖母から戦時中の話を聞くうちに平和の尊さをより深く実感していったと語った。さらに、新宗連青年会の第28次アジア青年平和使節団（今年3月、タイ）での体験を振り返り、泰緬鉄道を訪れた際に感じた恐怖と戦争の悲惨さが改めて心に刻まれ、「過去の戦争であっても、決して他人事ではないことを痛感した」と語った。

その上で、「世界中の人々が安心して眠れて笑い合える世界をつくるためには一人ひとりの優しさとお互いを敬う心が不可欠。私たちは今あるこの尊い命を大切に世界平和実現のために精進し続けます」と決意を表した。

宮本委員長の先導で平和の祈り（黙祷）を捧げる

平和の祈り（黙祷）を捧げる教団代表者ら

全国戦没者追悼式 政府主催

戦争の惨禍、繰り返さない誓い

終戦から79年を迎えた8月15日午前11時51分から、政府主催の「全国戦没者追悼式」が東京都千代田区の日本武道館で開催された。遺族や天皇、皇后両陛下、岸田文雄首相ら約4千人が参列。コロナ禍を経て、5年ぶりに通常規模での式典となった。

天皇皇后両陛下は正午の時報に合わせ、標柱に向かい参列者らと共に黙祷を捧げ、先の大戦で犠牲となった日本人約310万人を悼まれた。この後、天皇陛下は「おことば」で、「多くの苦難に満ちた国民の歩みを思うとき、誠に感慨深いものがあります」と振り返り、「過去を顧み、深い反省の上に立って、再び戦争の惨禍が繰り返されぬことを切に願い、戦陣に散り戦禍に倒れた人々に対し、全国民と共に、心から追悼の意を表し、世界の平和と我が国の一層の発展を祈ります」と述べられた。

岸田文雄首相は「式辞」で「今日の我が国の平和と繁栄は、戦没者の皆様の尊い命と、苦難の歴史の上に築かれた」とし、戦没者の遺骨収容を国の責務として推進する意向を表明。さらに「戦争の惨禍を二度と繰り返さない。（中略）この決然たる誓いを、世代を超えて継承し、貫いてまいります」と語った。

この後、衆参両議院議長と最高裁長官、戦没者遺族代表が「追悼の辞」を述べ、天皇皇后両陛下が御退席の後、参列代表者が献花した。各団体代表では日本宗教連盟の石倉寿一理事長（新日本宗教団体連合会理事長）が献花した。

「おことば」を述べられる天皇陛下と皇后さま

靖国神社―岸田首相、今年も私費で玉串料奉納

15日午後、岸田首相は靖国神社には参拝せず、3年連続で「自民党総裁」の肩書で玉串料を私費で納めた。同日、木原稔防衛相と高市早苗経済安全保障担当相、新藤義孝経済再生相は靖国神社を参拝。超党派の「みんなで靖国神社に参拝する国会議員の会」の議員77人も同日、参拝した。

信教委 政治委

靖国神社の政治利用に対する意見書を提出

7月23日

新宗連の信教の自由委員会（信教委）の鈴木裕治委員長と、政治委員会（政治委）の力久道臣委員長は7月23日午前11時半に東京都千代田区永田町の自由民主党本部を訪れ、岸田文雄・内閣総理大臣宛ての「靖国神社の政治利用に対する意見書」を、自民党組織運動本部の金子恭之本部長に手渡した。

鈴木委員長と力久委員長ははじめに意見書の趣旨を説明。意見書では、総理や閣僚が靖国神社に「公式参拝」することは憲法の「政教分離」に違背し、「信教の自由」を侵害すると指摘。これまでの意見書提出の経緯も述べた。

さらに「信教の自由」と「政教分離」原則の観点から、「戦争犠牲者の慰霊・追悼は、国民それぞれが個人の信仰に基づいて行うべき」と強調。岸田総理が「内閣総理大臣」として靖国神社に真榊を奉納する行為は、特定宗教の「援助・助長」にあたり、他の宗教や無宗教の人々の「信教の自由」を侵害していると懸念を表明した。

また、総理の行為は特定の支持者へのアピールや宗教団体の政治利用が疑われ、宗教と政治の歪んだ関係を引き起こしていると指摘した。閣僚や国会議員が靖国神社に参拝する様子を喧伝する行動についても触れ、「信教の自由」と「政教分離」原則にどのような影響を与えるか再考を求めた。

国民民主、立憲、維新の3政党にも意見書提出

同日午後1時からは、永田町の衆議院第一議員会館会議室で、国民民主党の玉木雄一郎代表と面会。この後、永田町の立憲民主党本部で、泉健太代表と末松義規・企業・団体交流委員長代理と面会し、両党代表に「靖国神社の政治利用に対する意見書」を手渡し、意見書の趣旨を説明し、代表らと意見交換を行った。

日本維新の会の馬場伸幸代表宛ての「靖国神社の政治利用に対する意見書」意見書は同日に郵送し、提出した。（意見書全文は2面に掲載）

金子本部長㊨に総理宛ての意見書を手渡す鈴木委員長㊥と力久委員長㊧

この後、参列者全員で「平和の祈り」（黙祷）を行い、戦争犠牲者の慰霊と世界平和の実現を願い、黙祷を捧げた。

最後に、新宗連を代表して石倉寿一理事長（大慧會教団会長）があいさつに立った。「アジア青年平和使節団」が今年50年目を迎えたこと、さらに「8・14式典」が来年で60回目を迎えることに触れ、若い世代がさまざまな体験を通し、信仰を通じて平和への意識を育む重要性を強調した。

さらに、来年が終戦80年となることを受け、「すべてのいのちを尊ぶ世界実現のための祈りと慰霊推進事業」を今後も継続していく決意を表明。「一人ひとりが憎しみや怨みの心を捨て、対立や不信ではなく、調和と信頼の心を広げていけるように、皆さまと共に『祈り』を深めてまいりたい」と述べた。

滴々抄

世界平和を祈り続ける

「8・14式典」、長崎「原爆殉難者慰霊祭」に参列

今年は2年ぶりに「8・14式典」に参列しました。昨年は台風接近のため中継による参列となりましたが、やはり千鳥ケ淵墓苑の御霊の前で慰霊と平和祈願の祈りを捧げられたことに感謝いたします。

8月は、広島と長崎の原爆慰霊の日、そして15日の終戦記念日と日本中がすべての戦争犠牲者の御霊へ慰霊と平和祈願の祈りを捧げる月です。私も8日に長崎にて県宗教者懇話会主催の「原爆殉難者慰霊祭」に参列しました。今年は地元の新宗連青年会による「平和の灯」に海外からキリスト教、ユダヤ教、イスラム教の学生も合流して日本の青年たちと偕（とも）に参加されていました。

特にイスラエルとパレスチナの青年たちが長崎の原爆殉難者に灯を捧げる光景には、感動したと同時に現在紛争を先導している大人たちに是非ともこの青年たちの姿を見てもらい、愚かな争いは1日も早く終結することを決意して欲しいと切に願いました。

長崎でこうした平和への祈りを捧げながら、久しぶりの「8・14式典」ではまたさらに平和への祈りの大切さを実感いたしました。例年にない猛暑の中青年たちが汗をかきながら準備し、一生懸命にお役に務めている姿を見て、以前関わらせていただいた者からすると、きちんと慰霊祭の精神が継承されていることにとても感動しました。世代を超えて式典を運営していただくことに感謝いたします。

教団では、毎日正午に世界平和を祈ることを信徒に提唱しています。携帯電話や時計のアラームを設定してもらい、善隣教の祈りの言葉「天地一切一心正念経」を9回心の中で唱えてもらいます。いつでもどこでも誰にでもできる平和への祈りの輪を広げることで心から世界平和を希求する人を増やしましょうとも伝えています。

是非、皆様も偕に正午の平和の祈りをそれぞれの祈りの言葉で祈り続けませんか。大人も青年も子供たちも偕に平和な世の中づくりのために祈り続け、一人でも多くの人が幸せでありますようにと念じましょう。

（力久道臣・善隣教教主）

《今号の紙面から》

〈2面〉 新宗連能登半島第4次ボランティア隊報告、日本宗教連盟「能登半島地震の地域コミュニティにおける宗教法人の現状と課題」セミナー。
〈3面〉 新宗連第35回教団人セミナー。近畿と北海道総支部がすべてのいのちを尊ぶ世界実現に向けた祈りと慰霊推進事業。
〈5面〉 比叡山宗教サミット37周年記念「世界平和祈りの集い」、長崎県宗教者懇話会「第52回原爆殉難者慰霊祭」。
〈6面〉 第59回「8・14式典」主催者と新宗連代表あいさつ、「平和のメッセージ」全文。（次号発行は10月下旬の予定です）

栞（しおり）

戦争犠牲者慰霊並びに平和祈願式典（8.14式典）

「8.14式典」は、諸宗教が教義や信条の違いを乗り越えて、現在の平和の礎となったすべての戦争犠牲者に、慰霊の誠を捧げるとともに、「絶対非戦」の誓いを立て、平和を祈願するもの。1962（昭和37）年に第1回式典が開催され、第22回式典（1987年）では、その正式名称を「戦没者合同慰霊並びに平和祈願式典」から、現在の「戦争犠牲者慰霊並びに平和祈願式典」へと改め、すべての戦争犠牲者を、国や宗教をも超えて慰霊し、平和を祈念することを明確にした。

【訂正】前号1面左「新宗連第33期役員等」の評議員・中村浩之氏の教団役職「常任理事」は「教務部長」の誤りにつき、訂正しお詫びいたします。

解脱会伝記編纂委員会編
新版 解脱金剛伝 全3巻
A5判 上製函装 定価 各巻3000円（税込み）
世相善導、人心救済への道筋を説かれた解脱会会祖・解脱金剛（岡野聖憲）の生涯を全1549頁、3巻に収めた。会祖亡き後、その人格に触れて自らの内に深い帰依心を培い、世のため人のために生きるための学びの土台となる書。第1巻＝生誕から事業の失敗、大成を経て宗教の世界に目覚めていく前半生を描く。第2巻＝昭和4年に立教して以来、人心救済の道一筋に生き、教えの土台を完成するまでの事績を辿る。第3巻＝戦時下の厳しい時代の中で縦横無尽に教えを説き、救済活動を展開し、遷化されるまでの歩みを記す。
解脱会
〒160-0007 東京都新宿区荒木町4番地
Tel 03-3353-2191(代表) Fax 03-3353-3055

清文社
宗教法人の税務調査対応ハンドブック〔宗教法人税制と法制の解説を含めて〕
石村耕治 編
A5判3780円
平成25年からの新・税務調査手続にも対応！
宗教法人と税務調査についての基礎知識を中心に整理し、コンパクトに解説した、実務家・宗教関係者必携の一冊。
公益財団法人 日本宗教連盟推薦！
〒101-0047 千代田区内神田1-6-6
☎03(6273)7946 FAX03(3518)0299
http://www.skattsei.co.jp〈価格税込〉

芸術生活社【芸生文庫】
高齢期を快く生きるための“人生の道しるべ”
御木徳近著 パーフェクトリバティー教団第二代教祖が、宗教家としての悟りと長い人生経験、多くの人との出会いから、高齢期を心豊かに暮らすための新しい生き方を提唱する。
老春謳歌（ろうしゅんおうか） 長生きの秘訣
■定価700円（税込）
〒150-0047東京都渋谷区神山町16-1
電話03-3469-1153 FAX03-3465-6867

中央経済社
「48万円の壁」と「住民税非課税限度額の壁」を賢く突破する
やっとわかった！「年金＋給与」の賢いもらい方
太田哲二著
年金だけで悠々自適で暮らせる人は少なく、高齢になっても働く人が大勢います。そこで問題となる「年金＋給与」をどうもらうかについて、事例を用いてわかりやすく解説します。「年金＋給与」の生活では、働き過ぎると、落とし穴がまっています。どこまで給与をもらうのがいいのか、正確に把握することが必要です。
定価2200円（税込）
発売：中央経済グループパブリッシング
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-35
☎03-3293-3381 https://www.chuokeizai.co.jp

最新刊
頭よりもまず「からだ」から。「悩まない身心」をつくる方法とは？
からだで悟る！
断食僧が教える「悩まない身心」のつくり方
野口法蔵・著
五体投地、滝行、坐禅、断食……。日常生活や仕事に悩める現代人にこそ必要な〝悩まない身心〟のつくり方。そのすべてがわかる一冊。臨済宗円覚寺派管長・横田南嶺老師の推薦文を収録。
◎四六判◎208頁
◎定価1760円（税込）
佼成出版社
〒166-8535 東京都杉並区和田2-7-1
☎03(5385)2323 FAX03(5385)2334
https://books.kosei-shuppan.co.jp/

白馬社
合掌ができない子どもたち
浄土真宗本願寺派福賢寺住職 三上章道
四六判 定価1260円
『本願寺新報』の編集長を二十年に亘って務めてきた著者が、合掌ができない子どもたちとの出会いを契機に、戦後の日本社会が戦慄すべき「薄縁社会」となったプロセスを追い、その原因が宗教心の喪失にあることを解き明かす。そして新たに現出した「原発問題」にも、同根の原因があることを洞察していく。日本人の心の問題にするどく迫り、根本的解決への提言をまとめた必読書。
〒612-8469 京都市伏見区中島河原田町28-106
TEL 075(611)7855 FAX 075(603)6752
http://www.hakubasha.co.jp 価格税込

ハーベスト社
東日本大震災後の宗教とコミュニティ
星野英紀・弓山達也編 本体価格7200円＋税
東日本大震災後の福島県いわき市と相双地域のコミュニティの再建における宗教の役割（避難場所としての宗教施設、宗教教団や宗教者の動向など）を解明する。
療術から宗教へ
世界救世教の教団組織論的研究
隈元正樹著 本体価格3000円＋税

緊急出版 カトリック大阪教区神父 西山俊彦
平和憲法が平和への道、改憲は戦争への道
―わたしたちが核戦争の加害者とならないために―
世が平和ボケにあろうとも、「時すでに遅し」と後悔しないために、平和憲法の真価を見直す素養まで捨てるわけにはいかない。
●1400円＋税 四六判並製
248頁 ISBN 978-4-286-19691-6
文芸社
〒160-0022 東京都新宿区新宿1-10-1
☎03-5369-2299 FAX.03-5369-3066
https://www.bungeisha.co.jp
書籍のご注文はお近くの書店またはブックサービス☎0120-29-9625、ネット書店まで

新宗連

第4次ボランティア隊派遣
被災地に笑顔と元気を届ける

新日本宗教団体連合会（新宗連、石倉寿一理事長）ならびに新日本宗教青年会連盟（新宗連青年会、宮本泰克委員長）は、「令和6年能登半島地震」の被災地支援のため、第4次ボランティア隊を7月6日から12日まで、石川県七尾市に派遣した。

第3次隊に引き続き、「被災地NGO協働センター」（頼政良太代表）の協力を得て、支援活動を展開。加盟教団から、延べ106人が救援活動に参加、第1次からの延べ人数は521人となった。

被災住宅での、家具の運び出し作業

能登半島地震から半年あまりが過ぎた石川県では今も2千人を超える住民が避難所で暮らしている。仮設住宅への入居完了は8月下旬になる見通し。さらに、石川県内の被災地では建物の解体や撤去を行政が費用を負担して行う「公費解体」が本格化したが、手続きの遅れなどから、完了したのはわずか6%にとどまっている（令和6年7月15日現在）。今回の地震で石川県は来年10月までに解体を終える計画を立てたが、実現を危ぶむ声も出ている。

加えて、七尾市の災害廃棄物仮置場が7月末で終了するため、災害ごみ搬出の依頼が急増。こうした状況の中、参加者は被災住民からのボランティア要請に応じ、さまざまな支援活動に従事した。

参加者は被災住宅をチームごとに回り、がれきの撤去、瓦、ブロックの搬出、家具の運び出し作業などに汗を流した。被災状況を確認するとともに、不安な生活を送る住民の心に寄り沿った。

住民の一人は「私たち夫婦だけでは到底片付けきれなかった。本当に有り難い」と話した。

一方、被災地では、応急仮設住宅への入居が進む中、震災前の地域の人々のつながりが途絶えたり、一人暮らしの高齢者が孤立したりするなどの問題が出ている。そこで、被災地NGO協働センターでは発災直後から拠点である中島集会所で地域の被災住民に支援物資を配布。アンケートや聞き取り調査を基に一人ひとりのニーズを探り、新たな支援につなげている。さらに、支援団体の協力を得て、集会所や中島町の応急仮設住宅で住民同士の交流を兼ねたイベントを企画・運営。SNSを活用して、情報発信を行っている。

立正佼成会萩教会の男性会員（65）は、笑いの力で元気を届けようと、6、7の両日、中島集会所で「笑いヨガ&音楽健康セッション」を開催。7日に行われた石川県内の支援団体主催の「七夕コンサート」では、男性会員がギター奏者と共演し、オカリナ演奏を披露し、会場を沸かせた。

ミニ縁日では飲み物や焼きそば、ホットドッグなどがふるまわれた。また、玄関前の笹に、会場を訪れた人たちが願いごとを書いた短冊を次々とつるしていった。短冊には「能登半島のみなさんが一日でも早く安心した生活に戻り、笑顔が増えますように」などと書かれていた。

第2次支援金を寄託
被災地NGO協働センターに

新宗連は令和6年能登半島地震に際し、石川県七尾市を拠点に支援活動を展開する被災地NGO協働センターに対して、新宗連国際救援金から第2次支援として200万円を寄託した。（8月6日）

被災地NGO協働センターは、新宗連と新宗連青年会が4月から7月まで4次にわたり派遣したボランティアの受け入れ団体。同センターに対し1月9日に同救援金から第1次支援として100万円を拠出した。

能登半島地震

被災地に協力と支援を

日宗連　公益性に関するセミナー

過疎化と高齢化、宗教施設の役割と課題とは

質疑応答で意見を交わす

日本宗教連盟（日宗連、石倉寿一理事長）は7月19日午後1時から、石川県七尾市の真宗大谷派能登教務所で「令和6年能登半島地震の地域コミュニティにおける宗教法人の現状と課題」をテーマに、第7回「宗教法人の公益性に関するセミナー」を開催。能登地域の宗教法人関係者など約110人が参加し、オンラインと併用で行われた。

当日は主催者を代表して石倉寿一理事長がセミナーの趣旨を説明。盛山正仁・文部科学大臣のビデオメッセージに続き、大阪大学大学院教授の稲場圭信氏が基調報告。発災直後、支援物資を搬送するため、学生らと共に被災地に入り、その後もさまざまな宗教者や大学機関と協力し支援活動を継続、被害状況の調査を行ったことを明らかにした。

その上で、石川県内で35の宗教施設が緊急避難所となり、支援物資の集積・配布場所として地域に開放されていることから、地域資源としての宗教施設の重要性を強調。「被災した宗教施設への支援は地域の人々を助けることにつながり、能登半島地震の事例を基に、他の地域でも同様の支援体制が構築されることが期待される」と語った。

一方で、能登半島は震災前から過疎化と高齢化が進行していた地域であり、住民が長年暮らした土地を離れることで宗教法人の維持が困難に陥ると指摘した。

「日本宗教連盟と文化庁が協力して対応するとともに、行政との協力体制の構築が急務」と訴えた。

真宗大谷派能登教務所長の竹原了珠氏は震災直後から包括地域の災害対応に取り組み、「被害状況は予想を超え、復興の難しさを痛感した」と振り返り、能登地域の過疎化と高齢化が進んでいる現状も言及した。

その上で「宗派として復興支援を続けているが、その力には限界がある。多くの寺院は困難に直面し、公的支援の効果的な活用が求められている。制度が実際に利用可能な形で整備されることが重要」と述べた。

続いて、復興基金、指定寄附金制度、不活動法人への対応などについて、文化庁宗務課専門官の一色潤貴氏が「令和6年度能登半島地震に係る指定寄附金及び不活動法人対策について」、石川県総務部総務課主幹の吉川将生氏が「指定寄附金制度の申請事務の流れについて」、日本行政書士連合会の井上超由氏、向井隆郎氏が「行政書士の活用について」をテーマにそれぞれ発表した。

質疑応答では、指定寄附金制度の具体的な募集方法や、再建の在り方などで意見が交わされた。

首相 政党

靖国神社の政府利用に対する意見書（全文）

内閣総理大臣
岸田　文雄　殿

内閣総理大臣をはじめ閣僚の皆様には、円安による経済への影響、世界各地で紛争や侵略が続くなか、日々、難しい国家の舵取りにご尽力賜り、ありがとうございます。

さて、私どもは1979（昭和54）年から政府を代表する総理はじめ閣僚が、靖国神社に「公式参拝」することは、憲法に定める「政教分離」原則に違背し、「信教の自由」を侵害するものであることを訴え、慎重な対応をお願いし続けてまいりました。来年は終戦80年を迎えるにあたり、あらためて「公式参拝」などの形式を問わず、総理はじめ閣僚らによる靖国神社への関与について熟慮いただきたく、本意見書を提出いたします。

私どもは、「信教の自由」と「政教分離」原則の観点から、一貫して戦争犠牲者の慰霊・追悼は、国民それぞれが個人の信仰に基づいて行うべきものと申し上げてきました。

岸田総理におかれましては、総理就任以降、靖国神社の春秋例大祭に、「内閣総理大臣　岸田文雄」名で真榊の奉納を続けておられます。総理という政治的立場による靖国神社への関与は、特定宗教の「援助・助長」にあたり、政府によって当該宗教が、戦争犠牲者の慰霊・追悼において、他の施設などより特別なものであるかのような評価やイメージを与えています。この点は「政教分離」原則から、極めて重要な問題であり、他の多くの宗教を信じる人々、また、特定の宗教による信仰を持たない人々の「信教の自由」を侵害しうる問題であると懸念しております。

また、総理就任後から突然始められた行為は、ご自身の信仰心ではなく、役務上の恒例行事として奉納を続けられているのではないかと疑わざるを得ません。これらの行為は、特定の支持者へのアピールなど、政治的意図も感じられ、政治家が宗教団体を政治利用することは、当該宗教が本来大切にしている純粋な宗教性を毀損する行為と深く憂慮いたします。

また、そうした安易な宗教団体の政治利用が、昨今社会問題化している宗教と政治の問題を生み出しているといっても過言ではありません。

閣僚を含む国会議員は、政治的立場を掲げ靖国神社に個人や超党派の団体で参拝するなどの様子を喧伝する方々もいます。個々の「信教の自由」は基本的人権の根幹として尊重されるべきものですが、これら為政者の言動が「信教の自由」と「政教分離」原則の観点から、どのような影響を与えているのか、今一度、思料していただき賢明な判断と行動を重ねてお願い申し上げます。

令和6年7月23日
新日本宗教団体連合会
信教の自由委員会委員長
鈴木　裕治
政治委員会委員長
力久　道臣

立憲民主党
代表　泉　健太　殿

私どもは、1979（昭和54）年から政府を代表する総理はじめ閣僚らが、靖国神社に「公式参拝」することは、憲法に定める「政教分離」原則に違背し、「信教の自由」を侵害するものであり、厳に慎んでいただくよう、意見書を提出し続けてまいりました。来年は戦後80年の節目を迎えるにあたり、あらためて、国会議員らによる靖国神社への関与について熟慮いただきたく、本意見書を提出いたします。

私どもは、「信教の自由」と「政教分離」原則の観点から、一貫して戦争犠牲者の慰霊・追悼は、国民それぞれが自身の信仰に基づいてなされるべきと申し上げてきました。

国会議員による靖国神社への政治的立場に基づく関与は、当該宗教が戦争犠牲者の慰霊・追悼において、他の施設などより特別なものであるかのような評価やイメージを与えています。この点は「政教分離」原則から、極めて重要な問題であり、他の多くの宗教を信じる人々、また、特定の宗教による信仰を持たない人々の「信教の自由」を侵害しうる問題であると懸念しております。

また、貴党の国会議員の方々も、自らの政治的立場を掲げ、靖国神社に個人や、超党派の団体で参拝し、真榊等を捧げ、その様子を喧伝しています。これらの行為は特定の支持者へのアピールなど、政治的意図が感じられ、為政者が宗教団体を利用することは、当該宗教が本来大切にしている純粋な宗教性を毀損する行為と深く憂慮いたします。

また、そうした安易な宗教団体の政治利用が、昨今社会問題化している宗教と政治の問題を生み出しているといっても過言ではありません。

他方で、岸田文雄総理が、総理就任以降、靖国神社の春秋例大祭にあわせ、「内閣総理大臣　岸田文雄」名で真榊を奉納し続けていることに対しても意見書を提出しています。特に、総理大臣就任後から始められたこの行為は、自身の信仰に基づいたものではなく、役務上の恒例行事として奉納が続けられ、宗教団体の政治利用が疑われるという理由から、訴え続けています。

個々の「信教の自由」は憲法に定める基本的人権の根幹であり、尊重されるべきものですが、これら為政者の言動が「信教の自由」と「政教分離」原則の観点からどのような影響を与えているのか、立憲民主党におかれましても今一度、思料していただき、賢明な判断と行動をとられますよう、重ねてお願い申し上げます。

令和6年7月23日
新日本宗教団体連合会
信教の自由委員会委員長
鈴木　裕治
政治委員会委員長
力久　道臣

（同意見書は政党名・代表者名を変更し、23日に玉木雄一郎代表と面会し手交、日本維新の会の馬場伸幸代表には同日、郵送にて提出した）

立憲民主党の泉代表（右から2人目）に趣旨説明

国民民主党の玉木代表（左）と意見交換

全日本仏教会―

靖国神社公式参拝で見解並びに要請

8月6日

全日本仏教会（全日仏、池田行信理事長）は8月6日、岸田文雄・内閣総理大臣宛ての「首相及び閣僚の靖国神社公式参拝に関する見解並びに要請」文書を、東京都千代田区永田町の自由民主党本部で、池田行信理事長が自民党組織運動本部の金子恭之本部長に手交した。

見解並びに要請文書では、全日仏が1981（昭和56）年以来、首相及び閣僚の「靖国神社公式参拝」に一貫して反対の意思を表明していることを記し、靖国神社が過去において国家神道の象徴的な神社として、戦争遂行の精神的役割を果たしたこと。また、戦後、一宗教法人施設である靖国神社に首相及び閣僚が公式参拝することは憲法に定める「信教の自由」「政教分離」の原則に抵触するばかりでなく、「靖国神社が今もなお国家の中心的な戦没者追悼施設であるかのような誤解を招くことになりかねません」と危惧する。

さらに、戦没者の追悼は遺族がそれぞれの仰ぐ宗教によってなされるべきもので、国家の行う追悼のかたちとは戦争によって生命を奪われたすべての人々に対する深い懺悔と、世界平和に対する願いを込めて丁重になされるべきもの指摘する。

そして岸田内閣に「『信教の自由』と『政教分離』の原則に基づいて、国民誰もが安らかに心で戦没者を追悼することができますよう、賢明なご判断とより一層慎重な行動をとられますよう、重ねてお願い申し上げます」と要請している。

感染症の早期終息 紛争等の平和的解決を―「すべてのいのちを尊ぶ世界」の実現を祈念いたします（50音順）

宗教法人
阿吽阿教団本部教会
東京都港区高輪二丁目一番十三号
電話（三四七三）〇五二八番

宗教法人
大神（おおみわ）教
〒633―0001
奈良県桜井市三輪一一九八
電話　〇七四四―四二―六〇五七
管長　西野延和

宗教法人
神ながら教
教主　水野富久子
役員一同
名古屋市東区徳川一丁目15番18号
電話（九三五）〇一三八

宗教法人
救世真教
会長　新井光興
顧問　新井三知夫
群馬県高崎市箕郷町中野二九二
電話〇二七―三七一―三六三九
FAX〇二七―三七一―七一三二

宗教法人
現證宗日蓮主義佛立講
講主　上村日正
〒513―0809
三重県鈴鹿市西条二丁目三―六
電話　〇五九（三八二）〇四四一
FAX　〇五九（三八二）〇四四一

修養団捧誠会
総裁　出居徳久
会長　青木正孝

円応教（えんのうきょう）
教主　深田充啓
兵庫県丹波市山南町村森一―一
電話（〇七九五）七七―〇四三〇（代表）

開基百十五周年
宗教法人
加納太霊教院
院長　加納理孝
〒074―1273
北海道深川市音江町音江七五七番一号
電話　〇一六四―二五―一七八六
FAX　〇一六四―二五―一七九〇

宗教法人
擯営界教団
法主　林玄光
大阪府交野市郡津三丁目四十七番十三号
電話（〇七二）八九一―一一五八

解脱会
法主　岡野英祥
理事長　岡野英夫
〒160―0007
東京都新宿区荒木町四番地
電話　〇三（三三五三）二一九一
FAX　〇三（三三五三）三〇五五

思親会（しんかい）
会長　飯島法道
二五九―一〇二一　神奈川県伊勢原市子易一四五九
電話（〇四六三）九二―三一一一（代）

松緑神道大和山（しょうろくしんとうやまと）
教主　田澤清喜
代表総務　茶谷助
青森県東津軽郡平内町外童子字滝ノ沢一二ノ一三

社会変化と新宗教のあり方

第35回教団人セミナー　塚田穂高氏が講演

新宗連

新日本宗教団体連合会（新宗連、石倉寿一理事長）は6月26日午後3時15分から、東京・代々木の新宗連会館とオンラインを併用して、「第35回教団人セミナー」を開催した。講師の塚田穂高・文教大学教授が「現代日本の宗教―社会状況と新宗教のあり方」をテーマに講演した。

2020（令和2）年以降の新型コロナウイルスの世界的流行と、2022（同4）年7月の安倍晋三元首相銃撃事件によって社会的に大きく注目されたいわゆる「カルト」問題、「宗教2世」問題により、新宗教教団や新宗連のあり方が問い直されており、現代は日本宗教史における大きな転換点と指摘する専門家もいる。

塚田穂高氏

現代社会の（新）宗教について、第一線で研究を行い、社会的な発信も精力的に続けている若手研究者である塚田教授を講師に迎え、今後の宗教について語り合い、考える機会とすることをねらいとした。

企画委員会の田澤清喜委員長のあいさつの後、塚田氏が講演。はじめに現代日本の社会状況について、「人口減少社会」（都市集中と地方の過疎化、少子高齢化、経済の低迷）、「変わる家族」（晩婚・未婚化、単独世帯化、無縁社会など）、「グローバル化」（在留外国人の増加と多様化、インバウンド）、「メディア環境の変容」などを取り上げ、データに基づいて社会の大きな変化を概観した。

続いて現代世界と日本における宗教状況については、「宗教復興」と「原理主義の台頭」がある一方、日本の神道、仏教や欧米のキリスト教などの制度宗教（伝統宗教）の衰退傾向、新宗教（組織宗教）も伸びているとは言えない状況にあると指摘した。一方で「人々の宗教的関心・宗教性が無くなるわけではない」と述べ、「スピリチュアリティ」と呼ばれるような「拡散・偏在化する宗教性」や文化としての宗教（習俗、観光、皇室崇敬など）の根強さにも言及した。

この後、様々な世論調査、意識調査の結果を紹介し、現代日本の宗教の実態、宗教意識を解説。塚田氏自身が学生へアンケートで尋ねた結果では、新宗教についての授業を受け、実際を知ることによって、新宗教のイメージがよくなった学生が6割以上いること、「ビラ配りなどをやめてほしい。SNSなどを利用してもらった方が不信感などが拭える」というような興味深い回答が見られた。

最後に塚田氏は「『拡散化』が進むなかで、『信仰』『実践』『所属』セット型だった新宗教が今後どのようなあり方を模索するか。どのように社会と関わるかが問われているのではないか」とまとめた。

質疑応答では多様な事例、視点で意見を交わした。

すべてのいのちを尊ぶ世界実現に向けた祈りと慰霊推進事業

近畿と北海道が慰霊式典、供養

阪神淡路大地震 犠牲者慰霊式典

近畿

近畿総支部（高城泰志会長）は7月4日、神戸市の立正佼成会神戸教会と東遊園地で3部構成の総会（総務会・学習会・慰霊式典）を開催した。

午後1時から総務会を行い、総務以外に各府県協議会委員も出席した。午後2時からは立正佼成会神戸教会並びに神戸市東遊園地で阪神淡路大震災犠牲者に慰霊の誠を捧げる学習会並びに慰霊式典を開催した。

今回の式典は、新宗連の令和6年度事業計画である「すべてのいのちを尊ぶ世界実現に向けた祈りと慰霊推進事業」の一環として実施された。

式典には石倉寿一理事長をはじめ、近畿総支部を構成する6府県の協議会から新宗連加盟の6教団の役職者、遺族等が参列。大震災でのすべての犠牲者に思いを馳せ真心からの祈りを捧げた。

学習会は高城会長のあいさつで開式。受け入れ教団を代表して、兵庫県協議会の西村季代子議長が歓迎のあいさつを述べ、震災当時の様子を伝えるビデオが上映された。円応教光徳教会の女性会員、立正佼成会神戸教会の女性会員による信仰体験発表に続き、石倉理事長が講話を述べた。

石倉理事長は1995（平成7）年に発生した阪神淡路大震災当時、新日本宗教青年会連盟（新宗連青年会）の委員長を務め、ボランティア活動に従事した体験を述懐。さらに『新宗教新聞』（今年1月1日付）の年頭所感を紹介し、新宗連が掲げる「絶対非戦」と「すべてのいのちを尊ぶ世界の実現」という目標に基づく祈りと行動について披瀝。「『すべてのいのちを尊ぶ世界が実現するように』―これは私たちに課せられた使命です。この思いを皆さんが共有すれば、世界は動き、平和へと向かいます」と語った。また、能登半島地震の災害の現状と支援についても言及した。

最後に、猿楽年央副会長が閉会あいさつを述べた。この後、参加者は神戸市東遊園地に移動し、「1・17希望の灯（とも）び」前で慰霊式典を挙行した。

東遊園地で祈りを捧げる

北海道・樺太国事殉難者慰霊供養

北海道

北海道総支部は8月22日午前10時半から、旭川市の北海道護国神社で「北海道・樺太国事殉難者」慰霊供養を執り行った。新宗連本部で進める「すべてのいのちを尊ぶ世界実現に向けた祈りと慰霊推進事業」の一環として、石倉寿一理事長も参列した。

北海道総支部の大友祥江副会長は「お盆と終戦の月にいのちの尊厳について深く学び合う機会にしたい」と開会あいさつ。続いてあいさつに立った石倉理事長は、80年前の8月22日に起こった「対馬丸事件」に触れ、先の大戦では多くの未来ある人が亡くなったことを踏まえ、「今日は北海道護国神社で慰霊供養の手配をいただきました。神仏を信じる私たちが、祈りを続けていく使命があることを深く心に刻んでいきたい」と決意を述べた。

北海道護国神社での教団別礼拝

続いて小野雄一宮司が歓迎のあいさつを述べた後、明治戊辰の役より先の大戦に至る北海道、樺太関係の国事殉難者6万3159柱を祀る神社の由緒等について説明した。

本殿に移動し、正式参拝を行った後、教団別礼拝を行い、円応教、加納大霊教院、大慧會教団、松緑神道大和山、立正佼成会の代表者がそれぞれの礼拝様式で慰霊と供養を捧げた。

結びに佐藤義昭副会長が「新宗連スローガン『世界の平和に貢献しよう』を一歩ずつでも進めていけるよう、努力し続けていきましょう」と述べ、閉会した。

神習教と解脱会「祈り」を解説

首都圏　教化活動懇談会

首都圏総支部（本山一博会長）は7月18日午後2時から、東京・代々木の新宗連会館でオンラインを併用し、第2回教化活動懇談会を開催した。

講師の芳村氏㊧と藤原氏㊨

開催に先立ち、本山一博会長が、教化活動懇談会の趣旨を紹介。令和6年度のテーマである、教団の教義や宗教者の信仰観が凝縮された宗教行為である「祈り」について説明した。

講師は教派神道連合会加盟教団の神習教三世管長の芳村正徳氏（初代教主）と、新宗連加盟教団の解脱会理事の藤原博氏の2氏。

吉村氏は祈りの目的が神々へのもてなしや、日々の感謝を伝えることにあると述べ、「祈る」の語源について解説。「祈る」は心身を清め神に仕える意味の「斎（い、物忌）」と、思いを表す意味の「宣（のべる）」を組み合わせた「斎宣（のべる）」に由来すると説明した。

また、「神は国民が安心で、安全に過ごせるようにと願っている」とし、その神の願いを受け取るため、毎日神前で祈り続けることで心が変わると述べた。

続いて、藤原氏が解脱会の祈りの意義と実践について説明。会員が朝夕唱える「勤行法則」では、朝は命を与えられた感謝を表し、「世のため人のためふさわしく使ってください」と祈り、夕は「世のため人のために使わせていただいた」ことへの感謝を唱え、一日の報告や反省を行うと解説した。

解脱会で会員に伝える正しい祈りの心構えとして、「拝む心」が大切と述べ、「自分勝手な祈りは神仏への礼節が欠けている」と指摘した。さらに、解脱会の天茶を用いた供養の特徴を説明した。

質疑応答の後、川本貢市・首都圏総支部副会長があいさつを述べ、閉会した。

新宗連青年会

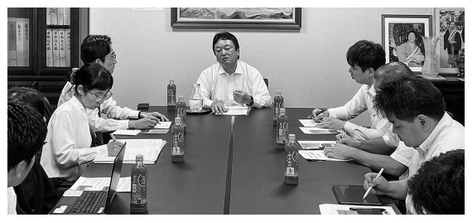
結成70周年事業　大慧會教団訪問

青年会元委員長　石倉理事長が講話

青近連

新日本宗教青年会近畿連盟（青近連、中島修平委員長）は7月13日午後1時から、大阪府堺市の大慧會教団本部で青近連結成70周年事業の教団訪問を実施した。

中島修平委員長のあいさつの後、大慧會教団、立正佼成会、福聚の会の青年がそれぞれ教団別礼拝を行った。礼拝後、新日本宗教青年会元委員長で新日本宗教団体連合会の石倉寿一理事長（大慧會教団会長）が講話を行った。


青年会の思い出を語る石倉理事長（中央）

石倉理事長は大学生時代に、核軍縮の決起集会（1982年）に参加し、横断幕を持って行進した経験が新宗連青年会との出会いとなったと振り返った。また、1992（平成4）年に初めて中国を訪問したアジア青年平和使節団（アジア懺悔行）での思い出を述懐。当時のエピソードとして、「資料も乏しく、反対の声もある中での訪中だったが、それでも反対していた教団からも参加者がいたことは非常に印象的だった」、「同じ釜の飯を食べ、仲も良くなり意見交換ができたことは人生の大きな転機、物事への考え方のヒントになった」と述べた。

さらに、懺悔行を通して「仏教は中道の教え、だからこそ自分達が手を合わせていく大切さを知り、自分の教団の教えの素晴らしさに気付くことができた」と語った。

その上で、現在の青近連に対し、「ありきたりの活動ではなく、自分たちで考えたことを実行に移すことが重要。70周年を迎えたからこそ、個々の繋がりを強くすることが今の時代に求められている」と呼びかけた。

この後、参加者は教団職員の案内で、展示室、多寶佛塔、法華一乗寶塔などを見学。最後に交流会が開かれ、参加者はそれぞれの感想を発表し、教団訪問は終了した。

福聚の会で交流会 杉浦会長が法話

青中連

新日本宗教青年会中部連盟（青中連、白井久美子委員長）は6月29日11時から、愛知県知立市の福聚の会（杉浦妙周会長）本部「青中連交流会」を開催した。

交流会は「語り合い、分かち合い、高め合い、深め合える場所」をテーマに、新宗連加盟教団の青年たちが集い、日々の信仰活動における実践や経験、体験を共有するもの。5教団の青年が参加した。

当日は、福聚の会責任役員の杉浦妙英氏（青年会中部連盟常任委員）が交流会の趣旨を説明。続いて、次代会長の杉浦妙隆氏が導師に読経供養が行われ、参加者も読経を体験した。

法話に立った杉浦妙周会長が、信仰の道を志したきっかけについて詳述（写真）。さらに、師である柴垣法隆聖師との出会い、福聚の会の創立に至る経緯について述べた。

式典後、参加者は屋外に設置したテントで昼食を囲みながら懇談。午後の部では福聚の会会員による和太鼓の披露やビンゴ大会が行われ、親睦を深めた。

最後に参加者が感想発表を行った。青中連の白井久美子委員長は「参加した皆さんが次回のユースフォーラムでの再会を楽しみにするきっかけとなれたらうれしい」と語った。

4総支部で総務会、学習会開催

新宗連の各総支部は、6月に開催した理事会と評議員会での決定事項等の共有と、各総支部の今年度の事業推進や情報交換を図るため、総務会、学習会等を開催した。

九州総支部（力久道臣会長）は7月8日午後1時半から、立正佼成会大分教会で総務会と学習会を開催した。

総務会で理事会の決定事項、青九連の活動状況を確認した後、「新宗連のあゆみとすべてのいのちを尊ぶ世界実現に向けて」と題して学習会を開催、大滝晃史事務局長が新宗連の原点と歴史を踏まえて、「すべてのいのちを尊ぶ世界実現に向けた祈りと慰霊推進事業」概要を説明した。引き続き意見交換を行い、コロナ自粛後の総支部・協議会活動のあり方について意見交換を行った。

中部総支部（田中庸仁会長）は高山市内で7月12日午後6時から懇談会、13日午前10時から崇教眞光世界総本山・第二神殿「愛和館」で総会を開催した。

総支部役員の交代について報告。新たに総支部副会長と愛知県協議会議長に就任した、杉浦妙周氏（福聚の会会長）があいさつを述べた。この他、青年会中部連盟の活動報告や近況等について情報交換を行った。

北関東総支部（新井光興会長）は7月23日午後1時半から、オンラインで総務会を開催した。次回、総務会（学習会）について検討。10月23日に立正佼成会高崎教会で行うことを決定し、当日は新潟中越地震から20年を迎え、慰霊の祈りを捧げることを確認した。続いて、青年会北関東連盟の活動報告や各協議会の現状等で情報交換を行った。

北陸総支部は7月26日午後1時半から、立正佼成会武生教会で学習会を開催。大滝事務局長が講師を務め、「新宗連の能登半島地震支援活動」「すべてのいのちを尊ぶ世界実現に向けた祈りと慰霊推進事業の概要」「新宗連の現在地―原点と歴史を踏まえた未来への展望」の3点をテーマに講演と質疑応答を行った。

感染症の早期終息 紛争等の平和的解決を―「すべてのいのちを尊ぶ世界」の実現を祈念いたします（50音順）

人にしんせつ 地球に感謝
宗教法人 真生会
会長 田中庸仁
総本山真生寺
住所 岐阜市彦坂一七八
電話 （〇五八）二三五―七三〇四

善隣教
教主 力久道臣
福岡県筑紫野市原田
電話（〇九二）九二六―一〇一〇（代）

大慧會教団
〒599-8126
大阪府堺市東区大美野142―14
TEL 072(236)1601
FAX 072(237)3107
URL http://www.daiei-kai.jp

大日如来様御奉戴の
宗教法人 大法輪台意 光妙教会
大日如来様御聖業奉讃会

一人ひとりが
神と出会い
一人ひとりが
神を現わす
玉光神社

宗教法人 天顕山 晃妙寺
住職 松本晃芳
役員一同
大阪府枚方市招提平野町四ノ一四
電話 〇七二―八五七―七四五六番

崇教眞光
SUKYO MAHIKARI
〒506-0055 岐阜県高山市上岡本町 2-596-1
TEL 0577(34)7008

宗教法人 祖神道教団
祖神 吉岡優
天宮神宮 西宮市山口町船坂一三一九
TEL 〇七八（九〇三）二〇〇二

宗教法人 大日然教

一切を生かす 神随らの教えのにわ
倖せへの 道しるべの神を祀る
大和教團
大國神社

天恩教
教主 鉢呂神龍
理事長 鉢呂金太郎
〒619―1301
京都府相楽郡笠置町大字有市小字西狭間一番地
電話（〇七四三）九五―二七八六

天光教總本部
大阪市天王寺区東上町八番十四号
電話代表大阪〇六（六七七一）三八八番

教祖の慈愛の心忘れず、働きに務める

立教105周年記念大祭　円応教

深田教主が「ご親教」で教祖の「天啓」について教示

円応教（深田充啓教主）は7月14日（遠方教会対象）、15日（近県教会対象）の両日、午後1時から兵庫県丹波市の円応教本部で「立教105周年記念大祭」を挙行した。

祭典は本殿礼拝所で行われ、奉納太鼓が響く中、深田充啓教主が入席。105周年の大祭を祝うビデオが上映された。

来賓あいさつに続き、記念修法が行われ、深田千代子教祖への感謝や懺悔、誓いの教文が唱えられた。

続いて、まと霊符授与式に移り、代表して小坂匡弥理事長が深田教主から深田教祖の「ご分霊」である「まと霊符」を拝受した。

この後、深田教主が「ご親教」に立ち、「天啓」について教示。「御教祖様が我が身を捨て、人のために尽くし通された慈愛の心を忘れず、人様から重宝がられ、どんなことでも道具となって、周りの方々を幸せにしていける働きに務めてまいりたいと思う次第です。今後とも、合掌の心で力を合わせて、希望を持って御教祖様のみ心に沿えるよう、明日に向かって頑張っていただきたいと思っています」と説いた。

最後に立教記念歌を斉唱し、祭典は終了した。

また、両日とも午前10時から「祖霊祭」を本殿礼拝所で厳修し、深田教主が祭文を奏上。自覚反省懺悔文が唱えられる中、深田静子夫人や責任役員らが供養簿を転読した。深田教主は「ご親教」で「物故者や諸霊位のご供養をさせていただき、在りし日のお姿を思い出し、涙された方もあると思います。信仰する者は特に、おしのびするだけではなく、育てていただいたご恩を忘れてはいけません。御教祖様のみ教えを通じて何事もよき方に悟り、先人の方々を手本として、陰の行に務めていただきたい」と述べた。

さらに、午前11時からは本部礼拝所で「円心まつり」を開催し、太鼓演奏やフラダンス、テノール歌手の加藤ヒロユキ氏による奉祝コンサートが催された。加藤氏とフラダンスのメンバーは立教105周年特別バージョンの「御教祖とともに」を披露し、観衆を魅了した。

和の精神持ち、平和へ努力を

「戦争犠牲者慰霊・平和祈願の日」式典　立正佼成会

庭野光祥次代会長を導師に読経供養

立正佼成会（庭野日鑛会長）は8月15日午前9時から「令和6年次『戦争犠牲者慰霊・平和祈願の日』式典」を東京・杉並の大聖堂で挙行した。式典の様子はライブ配信（会員限定）され、会員は自宅で式典の映像を視聴し、戦争犠牲者に慰霊の誠を捧げるとともに世界平和を祈念した。

式典は映像作品「平和への誓い」を上映後、読経供養が行われた。導師をつとめた庭野光祥次代会長は庭野日鑛会長の「回向文」を奏上し、焼香と献鶴を行った。

仏讃歌「この光あるところ」を斉唱後、庭野会長が登壇。焼香と献鶴を行い、法話を述べた。

庭野会長は日本の国旗、国歌に込められた意味や由来を詳述。日本の国旗について、白色が素直な心、赤色の太陽の印が『日出づる国』を象徴し、平和への願いや感謝の気持ちが込められている」と説明した。

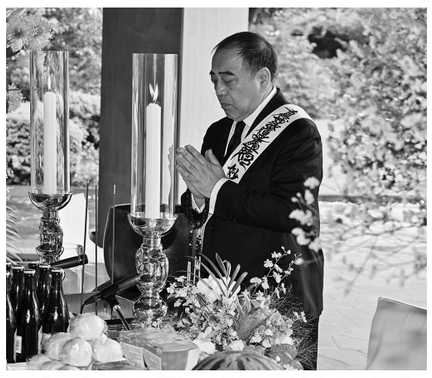
さらに、国歌「君が代」の由来は「古今集」に収められた歌であり、「君が代」の「君」は日本国の象徴である天皇陛下と、日本国民全体を指すと明らかにした。歌詞の内容について、「小さな石が集まって大きな岩となり、その岩に苔が入るほどに日本が末永く平和で豊かになるようにとの願いが込められている」と述べ、国旗や国歌に込められた願いを理解し、尊重する大切さを示した。

また、人工衛星から撮影された地球や太陽フレアの写真を紹介し、「私たちの命は太陽や地球のおかげさまであるということをしっかりと受け取って、戦争などをしないような地球にしてまいりたい」と述べた。

続いて、日本の国がかつて「大和（やまと）」と呼ばれていた由来について解説。聖徳太子が制定した「十七条憲法」の第一条に示された「和を以て貴しと為す」を挙げ、日本の古称である「大和」に込められた精神に言及。「大和」は英語で表すと、「大いなる平和」「大いなる調和」を意味し、「そうした和の精神をしっかりと私たちのものにして、それを世界に広げて、平和に暮らせるような努力をさせていただくということが大切」と説いた。

諸精霊の成仏、絶対非戦を誓う

うら盆供養　本部と千鳥ヶ淵戦没者墓苑で厳修　妙智會教団


戦没者の成仏を願い、祈りを捧げる宮本法嗣

妙智會教団（宮本惠司法嗣）は7月14日午前10時から、東京・代々木の本部本殿で「本部うら盆供養」、また午後1時から東京・九段の国立・千鳥ヶ淵戦没者墓苑で「戦没者うら盆供養」を厳修した。

「本部うら盆供養」は、コロナ禍の制限が解除されたことにより、首都圏を中心に全国各地から多くの会員が参集した。

当日は青年部員16人による献灯・献華・献供の儀が行われ、宮本惠司法嗣が献灯・献華した。宮本法嗣は祈願の中で、「新盆を迎えた信者さんをはじめ、命をつないでくださった大勢のご先祖さまに感謝を込めて、お灯とお花と御食をお捧げし、ご供養させて頂きます。さらに集まれる有縁無縁の諸精霊さまのご成佛をも強く念じ、先祖供養・流産児供養をする人々を育む慈悲行のお導き修行を一人ひとりが必ずさせて頂きますことをここに固くお誓い申し上げます」と奉読した。

続いて女性会員の体験発表があり、宮本法嗣が「ご指導」を述べた。

午後の千鳥ヶ淵戦没者墓苑での「戦没者うら盆供養」では、連日の猛暑から一転雨模様となり、過ごしやすい天候に恵まれた。

青年部員による献灯・献華・献供の儀、導師の宮本法嗣による献灯・献華の後、宮本法嗣が六角堂の導師席に着座して「ご祈願」を奏上。今年は戦没者八十回忌にあたることから、改めて「戦没者うら盆供養」の意義を紹介した。同供養は戦争の悲劇を風化させず、後世に語り継ぐとともに、絶対非戦と世界平和の実現を誓うためのものであり、今年も新たに301柱の戦没者が墓苑に迎えられたと奉告。その上で、各自の使命を自覚し、精進努力することを誓った。

妙智音楽隊による演奏に続き、宮本法嗣があいさつに立った。「雨も止み、お陰さまで今年も無事に戦没者うら盆供養を行うことができました。戦争の原因の一つは、人を許さないという根性にあります」と述べ、「自己中心的にならず、他者を思いやる心を育んでください。自己中心的にならず、他者を許す。この場で、もう一度それを誓って頂きたいと強く願っています」と結んだ。

情報錯綜の時代　祈りに向き合う

第35回光まつり　大和之宮

安食祭司長が祭儀を執り行った

大和之宮（安食克己代表役員代務者）は7月15日午前10時から、山形県山形市の本部で「第35回光まつり」を斎行した。

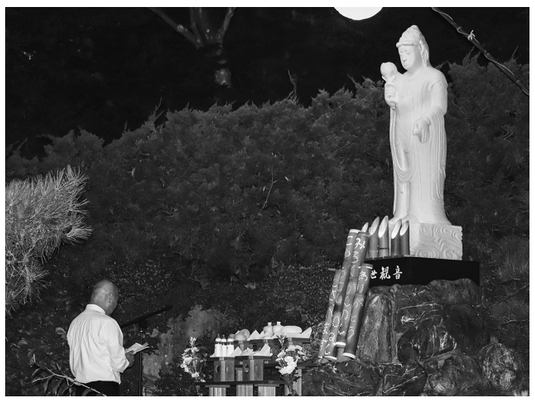
信徒会館3階の広間に阿弥陀如来と釈迦如来、寿光観世音菩薩を祀り、安食克彦祭司長が導師となり祭儀を執り行い、参列者と共に読経した。

祭儀を終え、安食祭司長があいさつ。「さまざまな情報が錯綜し、その情報が正しいものかそうでないかに関わらず、考え方や捉え方の違いで分断されてしまいかねない世相となっている。一緒になって誰かを悪者にし、叩くのではなく、そのような中だからこそ毎日の祈りにきちんと向かい、安食天惠宮主から受け継いだ教えを忘れずに、曲がらずまっすぐ生活していただきたい」と説いた。

この後、参列者一人ひとりが焼香し、希望者には「守護仏」が授けられた。

救世観音の建立由来を紹介

救世真教　第58周年立教祭・救世観音入魂50年祭


救世観音像前での入魂50年祭。新井会長が祝詞を奉上

救世真教（新井光興会長）は8月3日午後6時から、群馬県高崎市の本部聖地において「第58周年立教祭・救世観音入魂50年祭」を執り行った。

みろく太鼓により開幕。「誓い」「信条」を唱和の後、新井光興会長が斎主になり「第58周年立教祭祝詞」を奏上。斎主と参拝者代表が玉串奉奠を行った。

「天津祝詞」と「第58周年立教祭御歌」を奉唱し、「教主様に感謝の礼拝」「万霊位に礼拝」。そして「御浄霊」「真鏡拝読」に続いて新井会長が登壇し、「御教え」。第58周年立教祭と救世観音入魂50年祭の意義について、1974（昭和49）年、小野田松造教主昇天3年祭に建立された救世観音像の背面に刻まれている碑文を紹介し、教主の「御遺言」と当時の様子を思い起こした。また、同時に建立された教主胸像の銘文も紹介した。

その後、照明に映し出された観音像の前に移動し、「救世観音入魂50年祭」を執り行った。「祓詞」「救世観音入魂50年祭祝詞」を奏上、全員で「善言讃詞」を奏上し「教団歌」斉唱で祭典を終了した。

当日は今年一番の猛暑だったが、標高600㍍の聖地は心地よい風が吹き、屋外の会場で祝賀会を催した。地では『五穀豊穣』『人々の幸せ』『世界平和』が大切な祈りであり、これは天皇陛下をはじめとする御皇室が日々祈られていることでもあります」と述べ、世界の恒久平和を祈る意義を説き示した。

この後、第1団は外宮、内宮の順に参拝し、日々の恩恵に感謝の祈りを捧げた。午前10時には第2団も結団式を行い、同様に外宮、内宮の順で参拝した。

次なる聖地、奈良県橿原市の橿原神宮では鼓笛隊の先導で参進し、神武天皇をはじめとする先人への感謝と、国を守り続ける決意を新たにした。

4日には京都市の御寺泉涌寺で、第1団、第2団ともに「仏殿前の儀」を執り行い、月輪御陵や霊明殿をそれぞれ参拝した。

巡拝の最後には、鼓笛隊の先導で泉涌寺境内の解脱金剛宝塔に向けて参進。宝塔前で奉納の儀や焼香、勤行の後、7人の青年部員有志が岡野聖法会祖（金剛さま）に誓願を立てた。

締めくくりとして、東京ブロック鼓笛隊全体による合同演奏が行われ、参加者全員で「青年錬成歌」を合唱。最後に、第1団は木崎教務局長、第2団は中村浩之教務部長からそれぞれ総評と今後の青年部活動への期待が語られ、最後に岡野団長の解団宣言をした。

全国各地から参集し平和を祈り感謝捧ぐ

第40回青年部三聖地巡拝錬成　解脱会

泉涌寺仏殿から解脱金剛宝塔へ参進

解脱会青年部（岡野孝行青年本部長）は8月3日から4日にかけて、全国各地から青年部員が集い、「第40回青年部三聖地巡拝錬成」を実施した。巡拝は第1団と第2団に分かれて行われ、全国各地からバスで出発。3日午前6時半に、第1団が三重県伊勢市の伊勢神宮外宮前広場に到着し、結団式が行われた。

結団式で、岡野孝行団長は「お互いに助け合い、喜びを分かち合いながら、この巡拝行を共に完遂しましょう」と激励した。

続いて、木崎成博教務局長は「三聖地では『五穀豊穣』『人々の幸せ』『世界平和』が大切な祈りであり、これは天皇陛下をはじめとする御皇室が日々祈られていることでもあります」と述べ、世界の恒久平和を祈る意義を説き示した。

この後、第1団は外宮、内宮の順に参拝し、日々の恩恵に感謝の祈りを捧げた。午前10時には第2団も結団式を行い、同様に外宮、内宮の順で参拝した。

次なる聖地、奈良県橿原市の橿原神宮では鼓笛隊の先導で参進し、神武天皇をはじめとする先人への感謝と、国を守り続ける決意を新たにした。

4日には京都市の御寺泉涌寺で、第1団、第2団ともに「仏殿前の儀」を執り行い、月輪御陵や霊明殿をそれぞれ参拝した。

巡拝の最後には、鼓笛隊の先導で泉涌寺境内の解脱金剛宝塔に向けて参進。宝塔前で奉納の儀や焼香、勤行の後、7人の青年部員有志が岡野聖法会祖（金剛さま）に誓願を立てた。

締めくくりとして、東京ブロック鼓笛隊全体による合同演奏が行われ、参加者全員で「青年錬成歌」を合唱。最後に、第1団は木崎教務局長、第2団は中村浩之教務部長からそれぞれ総評と今後の青年部活動への期待が語られ、最後に岡野団長の解団宣言をした。

感染症の早期終息 紛争等の平和的解決を―「すべてのいのちを尊ぶ世界」の実現を祈念いたします（50音順）

七曜会

妙智會教団
東京都渋谷区代々木三ノ三ノ三
電話（三三七〇）五四〇三（代表）

宗教法人 大和教
管長・教祖 保積敬子
宮城県塩竈市南町六―五
電話（〇二二）三六二―一三九二

宗教法人 良辨教本部教会
〒五八一―〇八一三
大阪府八尾市泉町一丁目一三七の三
電話（〇七二）九九六―四九一六番

宗教法人 霊波之光教会
総教司令本部

月読之命奉斎
榊の葉でみる神占
宗教法人 和光道教団本部
大阪市天王寺区上本町二丁目一の二十三
電話 大阪（六七六一）一四八〇番

宗教法人 日月神一条
管長 嘉納良樹
吹田市内本町一丁目九の四
電話（六三八一）四一六九番

妙道会教団
会長 佐原慶治
〒543―0034 大阪市天王寺区松ケ鼻町四―三四
電話 〇六（六七七一）二〇五〇

kosei 生かされ、生きるチカラ。
立正佼成会
会長 庭野日鑛
理事長 熊野隆規
〒166―8537 東京都杉並区和田二―十一―一
電話〇三（五三四一）一六一五
https://www.kosei-kai.or.jp

公益財団法人 世界宗教者平和会議日本委員会
会長 杉谷義純
理事長 戸松義晴
〒166―8531 東京都杉並区和田二丁目七番一号
普門メディアセンター三階
電話（〇三）三三八四―二三三七

公益財団法人 庭野平和財団
理事長 庭野浩士
160―0022 東京都新宿区新宿一丁目一六番九号
シャンヴィラカテリーナ5階
電話 〇三（三二二六）四三七一番
FAX 〇三（三二二六）一八三五番

公益財団法人 新宗連
〒151―0053 東京都渋谷区代々木5―57―10
電話 〇三―三四六八―五五五一

終戦79年－広島・長崎・沖縄で慰霊式典

宗教者が集い、戦争犠牲者への追悼と平和の祈り

終戦から79年を迎え、戦争で大きな被害を受けた広島、長崎、沖縄では宗教者による慰霊式典が行われ、新宗連加盟教団の信徒・会員らが参加した。参列者らは戦争犠牲者に哀悼の誠を捧げるとともに、世界平和の実現に向け、非戦の誓いを新たにした。

長崎市松山町の爆心地公園で行われた「第52回原爆殉難者慰霊祭」

長崎県宗教者懇話会（会長＝今村豊親・大浦諏訪神社宮司）は8月8日午後7時から、長崎市松山町の爆心地公園で「第52回原爆殉難者慰霊祭」を開催した。

同慰霊祭は宗教・宗派を超えて、市民と共に原爆殉難者を追悼し、世界平和への願いを深めるもの。主管は長崎県明るい社会づくり運動推進協議会（会長＝大石賢吾・長崎県知事）。懇話会加盟の諸宗教者に加え、世界連邦日本宗教委員会、世界宗教者平和会議（WCRP）日本委員会、新日本宗教団体連合会九州総支部、広島県宗教連盟のメンバーや市民らが参列した。

式典は天理教長崎教区雅楽部による「雅楽奏楽」で開幕し、カトリック中町教会聖歌隊有志が「慰霊聖歌」（レクイエム）を合唱。諏訪神社の神職2人による「お清めの儀」、諏訪神社の吉村政徳宮司による「献水の儀」が行われ、立正佼成会長崎教会の児童2人が「平和の誓い」を読み上げた。

続いて、イスラエルとパレスチナの青年代表や諸宗教青年代表が「平和の灯」を献じ、参列者を代表して宗教者ら5人が「慰霊のことば」を捧げた。

この中で、世界連邦日本宗教委員会の田中恆清会長（石清水八幡宮宮司）は、ロシアによるウクライナ侵攻やイスラエルとイスラム組織ハマスの紛争に言及し、「これらの惨劇は再び起こり得る」と警鐘を鳴らした。その上で「今こそ、私たちは家族を愛し、寛容の精神を育み、万人に感謝し、和の心で叡智を結集し、平和を希求し、祈り続けます」と訴えた。

世界宗教者平和会議（WCRP）日本委員会の戸松義晴理事長（代読＝水谷周・日本ムスリム協会理事）は原爆で家族を失った遺族の深い悲しみや、被爆者が今なお後遺症に苦しんでいる現状を紹介。被爆者の平均年齢が85歳を超え、戦争を直接経験した世代が減少する中で、戦争の記憶が風化しつつある現状を憂慮した。

さらに、7月8～10日に広島市で世界の宗教指導者らが集い、AIの利用や開発に倫理的な取り組みを求める提言を発表したと報告。「そこで共有されたのは、AIが核兵器に利用されることで核兵器使用のリスクが一段と高まっている現実であり、そのために早急な核兵器廃絶の実現が強く求められている」と述べた。

最後に、今後も世界中の宗教者と連帯し、核兵器のない世界の実現を目指して対話と実践を重ねることを誓い、原爆殉難者への慰霊の言葉とした。

「沖縄宗教者の会」は終戦記念日を迎えた8月15日、「第32回祈りと平和の集い」を糸満市摩文仁の沖縄平和祈念堂で開催し、諸宗教者らが参列した。

新宗連青年会中国連盟

第39回原爆犠牲者慰霊並びに平和祈願式典

学生部員らによる「献花」

新日本宗教青年会中国連盟は7月20日午後6時から、広島市中区の広島平和記念公園内にある「原爆供養塔」前の広場で「第39回原爆犠牲者慰霊並びに平和祈願式典」を営んだ。

「原爆供養塔」には約7万人の遺骨が眠る。原爆で一家が全滅して身内がいなかったり、名前すら分からなかったりして今も引き取り手のない犠牲者たちだ。

新宗連青年会広島県委員会では1982（昭和57）年から毎年夏に慰霊供養を実施。コロナ禍を経て、4年ぶりの開催となった。

式典では、学生部員らによる「献花」、松緑神道大和山の代表者による「献水」に続き、NPO法人・ヒロシマ宗教協力平和センター（HRCP）の波田スエ子さんが被爆体験の講話を行った。

波田さんは8歳の時に被爆。自宅は爆心地からわずか800㍍の場所にあり、姉は瓦礫の下敷きになり、波田さんだけが這い出して生き残った。姉を助けようと必死に叫んだが、誰も助けには来なかった。この辛い記憶は、今もなお波田さんの心に深い傷を残している。

その後、波田さんは孤独な日々を過ごしながらも結婚し、2人の子どもに恵まれた。仏教の教えを学ぶ中で、自分が生き残ったのはこの体験を伝えるためだと強く感じ、1994（平成6）年から被爆体験の証言活動を始めた。「私はこの役目を果たすために生き残った」と語る波田さんは、孫がアメリカ人と結婚したことをきっかけに、日米の平和への懸け橋となることを願うようにもなった。

波田さんは、現在も戦争の悲惨さを伝えることを自らの使命とし、「どんな理由があっても、戦争だけは絶対に許されない」という強い信念を胸に、証言活動を続けていることを明言した。最後に「戦争に苦しむ人々に一日も早く平和が訪れることを願っています」と結んだ。

続いて、教団別慰霊供養が行われ、松緑神道大和山、善隣教、崇教眞光、立正佼成会の各教団の代表者が原爆犠牲者に慰霊の誠を捧げ、絶対非戦の誓いを新たにした。

この後、参列者が1分間黙祷を捧げ、立正佼成会の青年部員3人による三線、アコーディオン、フルートの演奏で唱歌「ふるさと」を合唱し、式典は終了した。

千鳥ヶ淵戦没者追善供養並世界立正平和祈願法要

非戦を誓い　恒久平和の願い新たに

日蓮宗

日蓮宗（田中恵紳宗務総長）は8月15日午前9時から、東京都千代田区の国立千鳥ケ淵戦没者墓苑で「令和6年度千鳥ケ淵戦没者追善供養並世界立正平和祈願法要」を厳修した。同法要は国立千鳥ケ淵戦没者墓苑が1959（昭和34）年に創建以来、毎年8月15日に行われている。

当日は田中恵紳宗務総長が大導師、東京4管区所長が副導師を務め、読経供養を営み、戦没者を追悼し、世界の恒久平和を祈願した（写真）。

続いて、日蓮宗の田中宗務総長があいさつに立った。田中宗務総長は戦後79年が経過し、戦争の記憶が薄れつつある現状を憂慮。戦争を経験した世代が減少する中で、戦後生まれの世代が果たすべき役割として、戦没者への感謝と祈りを挙げ、再び戦争が起こらないように平和を誓う大切さを説いた。

さらに、現在の日常が戦没者の尊い犠牲の上に成り立っていることを深く自覚するとともに、「多くの人々が国や地域を思いやり、世界平和が一日も早く実現することを願ってやまない」と語った。

また、未来を担う子供たちが平和な日常を過ごせるよう、戦没者の供養と世界平和の祈願を今後も続ける決意を表明。猛暑の中、参列者への感謝を述べ、「この法要がすべての命と希望を未来へとつなげる縁となることを願う」と結んだ。

最後に、千鳥ケ淵戦没者墓苑奉仕会の榊枝宗男理事長があいさつに立ち、日蓮宗による平和祈願法要の執行に対し、感謝の意を表した。

－比叡山宗教サミット37周年－

「世界平和祈りの集い」

宗教代表者らがそれぞれの祈り捧ぐ

「平和の鐘」が打ち鳴らされ、「平和の祈り」を捧げた

比叡山宗教サミット37周年「世界平和祈りの集い」が8月4日午後、滋賀県大津市の天台宗総本山比叡山延暦寺で開催された。

午後1時から延暦寺会館で行われた「平和の式典」では、天台宗の阿部昌宏宗務総長が「開式の辞」を述べ、世界各地で続く戦争や紛争に対して、武力ではなく対話と相互理解による問題解決の重要性を訴えた。

続いて、ペシャワール会PMS支援室室長の藤田千代子氏が「平和の力を信じ―中村先生の意志を継いで」をテーマに講演した。

藤田氏はパキスタンやアフガニスタンで医療支援活動に従事していた医師の故・中村哲氏との思い出を振り返り、中村氏から受けた影響について詳述。特に現地の文化や習慣に対する理解を深めることの大切さを強調し、中村氏の「現地の文化を自分の物差しで測ってはいけない」という言葉が自身の行動や考え方に大きな影響を与えたことを明らかにした。

さらに、「灌漑（かんがい）事業で水が通った時に現地の子供たちが集まってきて、満面の笑顔で喜ぶ姿は感慨深かった」と述べ、「現地の方の笑顔を最初に見ることができるのは私たちの役得だ」という中村氏の言葉を紹介した。

講演後、「ユニセフ支援金寄託式」が行われた。

午後3時20分からは、一隅を照らす会館前「祈りの広場」で「平和の祈り」を執り行った。

まず次世代を担う青年を代表して、神社神道代表の金子元紀氏、教派神道連合会代表の北川真喜子氏の二人が「比叡山メッセージ」を朗読。「平和のために祈るべくここに集まったわれわれの営みが、世界の到るところで繰り返され、繰り広げられ全人類が渇望してやまないこの大いなる平和の賜物が、われわれの時代に与えられんことを切に祈る」と呼び掛けた。

続いて、大樹孝啓・天台座主をはじめ、日本宗教連盟協賛5団体、日本ムスリム協会、世界宗教者平和会議（WCRP）日本委員会、世界連邦日本宗教委員会の各代表、日本宗教連盟の石倉寿一理事長（新日本宗教団体連合会理事長、大慧會教団会長）が登壇した。

午後3時半に「世界平和の鐘」が打ち鳴らされ、会場の出席者が起立して「平和の祈り（黙祷）」を捧げた。

大樹天台座主が主催者を代表してあいさつに立ち、気候変動による自然災害の常態化、世界各地で続く武力紛争に対する懸念を表明し、早急な復興と和解を願う連帯を呼びかけた。

この後、世界仏教徒連盟のパロップ・タイアリー会長とローマ教皇庁諸宗教対話省のミゲル・アンヘル・アユソ・ギクソット長官の「平和のメッセージ」が伝えられ、延暦寺の獅子王圓明執行が「閉会の辞」を述べ、「平和の祈り」を締めくくった。

祈りの集いには、新宗連加盟教団から宮本惠司・妙智會教団法嗣、田澤清喜・松緑神道大和山教主、保積秀胤・大和教団教主、熊野隆規・立正佼成会理事長、中村史郎・円応教常任参与（深田充啓教主代理）、仙波達治・崇教眞光西関東方面指導部部長補佐（岡田光央三代教え主代理）らが参列した。

対話で互いの理解を深め争いのない世界に

金光教東京センターが平和集会

パレスチナ問題から差別と戦争を考える

金光教東京センター（嶋田洋所長）は7月15日午後2時から、東京・秋葉原の金光教館で「第41回金光教東京平和集会」をオンライン併用で開催した。集会は毎回、時宜に応じた平和の諸課題をテーマにしており、今回は「ゆるす心、たしあう心～パレスチナ問題から考える差別と戦争」。

オープニングに続いて、「学びのひろば」では平和集会の企画委員らが紀元前10世紀まで遡る近隣大国による支配の歴史から、第二次世界大戦のホロコースト、現代のパレスチナとイスラエルの双方の主張、深刻な人道危機が続くガザ地区の現状、そして日本に何ができるのか、金光教の平和観からの視点などを、図説や映像を交えてわかりやすく解説した。

この後、嶋田洋所長を祭主に「戦争死者慰霊・平和祈願祭」を執り行った。祭儀では参列者一同で「平和の祈り」を奏上。祭主による「祭詞」奏上に続き、玉串奉奠が行われた。

この後、参列者一同で「戦争死者慰霊・平和祈願の詞」を奉唱、「金光教東京平和宣言2024」を発表した。

宣言ではイスラエルとパレスチナの悲劇の歴史を学び、身勝手な国際社会のありようが、人々をいわれなき悲劇に巻き込み、差別された人々が新たな差別を生み出し、その差別は非道な暴力を可能にするそして憎しみがあおられ、繰り返されていくとして、「これらのことは、今を生きる私たちの問題なのです」と問いかけた。

そして来年の戦後80年に向け、第二次世界大戦中、教団が国家に協力した歴史を反省し、「人類が今もなお戦争を繰り返してことを神様にお詫びしつつ、二度と戦争を起こさない不戦の誓いを新たにいたします」と表明した。

嶋田所長は閉会あいさつで、戦争体験者が減少するなか、日本が戦争できる国、戦争に巻き込まれる国の方向に向かっていることを危惧し、「来年の平和集会は戦後80年に焦点をあてて開催することを計画しています」と結んだ。

「学びのひろば」では人道危機の現状と、日本でできることは何かが問われた

RSE環境学習会

食と環境負荷問題学ぶ

東北大・齋藤名誉教授を迎え

齋藤忠夫氏

宗教・研究者エコイニシアティブ（RSE、武田道生代表）は6月22日午後2時から、日本教育会館で環境学習会をオンライン併用で開催した（写真）。

東北大学名誉教授で農学博士の齋藤忠夫氏が講演を行い、現在の食料危機の現状と未来の食料供給についての課題を訴えた。テーマは「身近な食のあり方～酪農乳製品生産過程における環境負荷問題の解決に向けて」。

齋藤氏は近年の異常気象、地域紛争、新型コロナ禍、そしてウクライナ戦争の影響により、世界で約3億4千500万人が食料危機に直面していると報告。さらに国連の試算によれば、2050年には世界人口が約100億人に達し、多くの途上国で水不足や食料危機が一層深刻化するとの見通しを示した。

その上で、限られた食料資源をいかに効率的に分配するかが重要であり、人間にとって不可欠な栄養素である「たんぱく質」の継続的な摂取の必要性を強調。たんぱく質は人体に貯蔵できず、消化酵素の生成に不可欠であるため、継続的な摂取が不可欠と述べた。

しかし、たんぱく質摂取の主な方法である食肉生産は、土地や水の使用量が多く、動物のゲップによるメタンガスの排出など、環境への負荷が大きいと指摘。中でも、メタンガスは二酸化炭素に次いで地球温暖化に寄与する温室効果ガスであり、環境への影響が大きいとの懸念を示した。

こうした現状を踏まえ、従来の食肉生産システムを見直し、代替肉や昆虫食の普及を強調し、具体的な4つの解決策を提示した。

第一に代替乳の活用を挙げた。大豆やアーモンド、オーツなどを主原料とした植物由来のミルクに加え、微生物の遺伝子操作によって大量の乳たんぱくを生成する精密発酵が注目されていると述べた。

第二に大豆など植物たんぱく質を利用した代替肉の生成。この方法は環境負荷を大幅に減らすことができ、宗教上の理由で食肉を避ける人々にも適している。しかし、生産コストが高く、動物肉と比較すると味が劣る点が課題として挙げられた。

第三に、動物の筋肉細胞を培養液に浸して代替肉を生成する方法を例示。衛生が保たれた環境で細胞増殖を促すこの方法は、元の筋肉細胞の肉質が反映されるため、味や食感が優れた代替肉の提供が可能と話した。

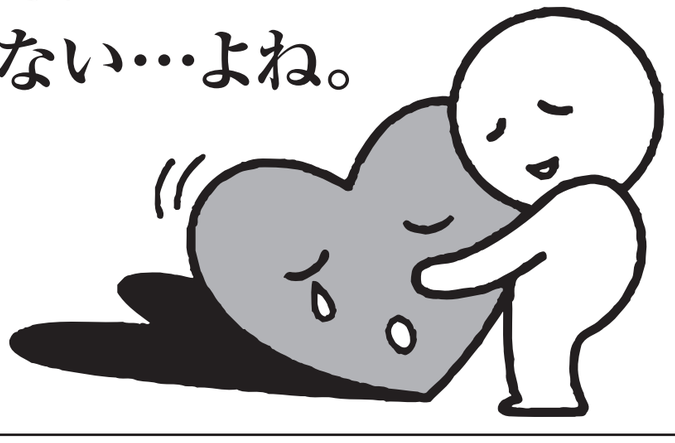
最後に、齋藤氏が最も推奨するのが昆虫食。昆虫食は食肉に匹敵する高たんぱく質を含み、ビタミンやミネラル、動物性脂質も豊富に得られる。また、「昆虫は飼料が少なく済み、成長が早く、温室効果ガスの排出が少ないため、環境負荷が軽減する」と説明した。

質疑応答では、各国における代替肉の規制理由や、日本での遺伝子組み換え食品の製造状況についての質問が寄せられた。

ひとりで悩まず電話して！
ホントにつらい時って誰にもいえない…よね。

●東京自殺防止センターは国際ビフレンダーズの一員です。
●私たちは国際ビフレンダーズ憲章に沿って活動しています。

●必要に応じて面接をしています。
●手紙でのご相談にも応じています。
●秘密は守られます。
●相談は無料です（通話料はかかります）。
●金銭的な援助はできません。
●医療・法律・教育関係の助言や指導は、専門家にお願いします。
●特定の思想・宗教・政党などとは一切関係ありません。



NPO法人　国際ビフレンダーズ
東京自殺防止センター
03-5286-9090
年中無休、夜8時から深夜2時30分まで
月曜は夜10時30分から深夜2時30分まで
火曜は夕方5時から深夜2時30分まで
〒169-0072　東京都新宿区大久保3-10-1 日本基督教団シロアム教会内
事務局電話番号　03-3207-5040（FAX 03-3207-5098）
●全国にある他の自殺防止センター
国際ビフレンダーズ 大阪自殺防止センター
06-6260-4343　毎週金曜、午後1時から日曜、午後10時まで
国際ビフレンダーズ 宮崎自殺防止センター
0985-77-9090　毎週日曜・月曜・水曜・金曜、午後8時から午後11時まで
国際ビフレンダーズ 岩手自殺防止センター
019-621-9090　毎週土曜、午後8時から午前0時まで
国際ビフレンダーズ あいち自殺防止センター
052-870-9090　毎週金曜、午後8時から午後11時まで

新宗連青年会　第59回 戦争犠牲者慰霊並びに平和祈願式典

世界平和と絶対非戦への誓い 新たに

折鶴と生花、供物で荘厳された六角堂

国立・千鳥ヶ淵戦没者墓苑　8月14日

新日本宗教青年会連盟（新宗連青年会）は8月14日午後6時から、東京都千代田区の国立・千鳥ヶ淵戦没者墓苑で「第59回戦争犠牲者慰霊並びに平和祈願式典（8・14式典）」を開催した。主催者あいさつと新宗連代表あいさつ、「平和へのメッセージ」の全文と、教団別礼拝で式典の模様を紹介する。

主催者あいさつ――人との繋がりを育み、平和実現の懸け橋に

新宗連青年会委員長　宮本泰克

本日は、「第59回戦争犠牲者慰霊並びに平和祈願式典」に新宗連加盟教団の代表者、信徒・会員の皆さま方に、ここ千鳥ヶ淵戦没者墓苑にご参集くださったこと、また全国から多くの皆さまが視聴を通してご参加くださっておりますことに、厚く御礼申し上げます。

さて、私たちがこの「8・14式典」を祈りの原点に「行動の柱」と位置づけ、アジア各地で慰霊の誠を捧げてきました「アジア青年平和使節団」（アジア懺悔行）は、今年の3月の派遣で第1次派遣から半世紀を迎えました。

今使節団では、懺悔行の原点でもあるタイ王国（ナムトクの丘）に、先達の先生方が建立されました、タイ式供養塔（サンプラプーン）に訪れ、日本軍による泰緬鉄道建設で犠牲になられたアジア人労務者、連合軍捕虜の方々をはじめとする、すべての犠牲者の御霊に対して慰霊供養を捧げてまいりました。

今回の懺悔行を経て、戦争を経験してない私たちが、「二度と戦争を起こしてはならない」という「絶対非戦」精神のもと、世界の恒久平和と「すべてのいのちを尊ぶ世界」の実現に向けてできることは何かと改めて考えさせられました。

また、4月には、私たちが「8・14式典」と並び、二大行事と位置付けているユースフォーラムでは、宮沢賢治の残した「ことば」をテーマに、故郷である花巻市を訪れ、信仰を見つめる機会といたしました。

昨年の8・14式典でのあいさつでも申し上げましたが、宮沢賢治が書き残したように「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」というのもまた真実だと今回の懺悔行とユースフォーラムを経て強く感じさせられる機会となりました。

戦争、紛争、飢餓、災害等があるなか、真の世界平和を達成することは、もちろん簡単なことではありません。現在私たちは、能登半島地震の支援の一環としてボランティア派遣を続けております。私たち宗教青年が先頭に立ち、今できることを行動し、そして、続けていくことで、人と人との繋がりが生まれ、それが真の世界平和実現の懸け橋になると信じています。

本日は、ご参列の皆さまと共に、すべての戦争犠牲者に対し、真心からの祈りを捧げさせていただきます。そして、「すべてのいのちを尊ぶ世界」の実現に向け、「世界平和」と「絶対非戦」への誓いを新たにさせていただきます。皆さま、どうぞよろしくお願い申し上げます。

新宗連代表あいさつ――終戦80年を見据え、祈りと実践を進める

新宗連理事長　石倉寿一

第59回「戦争犠牲者慰霊並びに平和祈願式典」の閉会にあたり、新宗連を代表してごあいさつ申し上げます。

本年も、ここ千鳥ヶ淵戦没者墓苑に鎮まります御霊を象徴として、すべての戦争犠牲者に対し、新宗連加盟教団の皆さまと真心からの慰霊とご供養を捧げることができました。ご準備くださった皆さま、ご参列いただいた皆さまに心からの御礼と感謝を申し上げます。

今年もこの式典に関わってくださったお一人お一人の真心が、戦争犠牲者の御霊にしっかり届けられたものと思います。

青年会の宮本委員長も触れていましたが、この「8・14式典」の祈りを原点として、1974年から派遣を続けてきた「アジア青年平和使節団」は本年3月の派遣で50年の節目となりました。

私自身も、今から44年前となる1980年、19歳（大学1年生）の時に「第3次アジア青年平和使節団」に参加させていただき、それから今日まで多くの先輩の皆さまに、宗教者としての平和に向けた姿勢や信念を教えていただいてまいりました。ご存知の通り、この式典は青年の手による運営が今日まで続けられ、来年は60回目を迎えます。

日本社会においては人口減少、少子高齢化が進んでいますが、これから信仰を継承してくださる若い方々が、この式典への参加をはじめとした、さまざまな体験を通して、信仰を深め、平和に向けた心を養っていただきたいと願っています。このような機会を大切にして、未来へ向けて、新宗連全体としても支援していきたいと思います。

新宗連では、来年終戦から80年を迎えることなどを見据えて、今年度から2年間、「すべてのいのちを尊ぶ世界実現のための祈りと慰霊推進事業」を進めています。

新宗連に参加する私たちは、日々の「祈り」を通して、自らその心を磨き、神仏からのご加護をいただき、目に見えない世界の存在を信じて、信仰者としての実践を誓っております。一人ひとりの力はわずかかもしれませんが、人類全体の幸福、世界平和に必ず繋がっていく実践行です。

世界では未だに戦争、紛争が絶えることはありませんが、「すべてのいのちを尊ぶ世界」の実現は私たち信仰者の重要な使命です。

一人ひとりが、憎しみや怨みの心を捨て、対立や不信ではなく、調和と信頼の心を広げていけるように、神仏からお力をいただいている私たちが、この2年間は特に真心を込めて、皆さまと共に「祈り」を深めてまいりたく存じます。

結びに、ここ千鳥ヶ淵戦没者墓苑に鎮まります御霊をはじめ、すべての戦争犠牲者の御前において、真の世界平和と「すべてのいのちを尊ぶ世界」実現に向かって精進し、「平和を希求し、祈り、行動する心」を磨いていくことをお誓い申し上げ、私のあいさつといたします。

皆さま、本日はご参列いただき、誠にありがとうございました。

平和へのメッセージ――曾祖母の経験、泰面鉄道から学んだ平和への誓い

立正佼成会会員　鈴木杏友沙

終戦から79年。先の大戦をはじめすべての戦争犠牲者の御霊に対し、平安を願い、謹んで慰霊の誠を捧げるとともに、「平和へのメッセージ」を述べさせていただきます。

私は中学生の頃から平和について考える機会が多くありました。家族で沖縄のひめゆりの塔に行ったことや立正佼成会が主催する「平和学習」に参加して戦争の映像や史料を見たことがきっかけとなり、夏休みの自由研究で戦争についてまとめました。自由研究を作成する際に、戦争を経験した曾祖母に当時の話を聞きました。曾祖母は当時、防空壕に入って避難をしていたと言い、「怖かった。もう二度とあんなことは起きてほしくない。今のこの平和が続くことが一番だ」と口にしていました。その曾祖母が立正佼成会に入会し、おかげさまで平和を学び、考える貴重な機会を多く経験させていただきました。

その一つとして、今年の3月に新宗連青年会が主催する第28次アジア青年平和使節団の一員としてタイを訪問しました。「ナムトクの丘」での慰霊供養では導師というお役を務めさせていただき、亡くなられた方々への慰霊と過去の過ちへの懺悔に想いを込めてご供養をあげさせていただきました。

そして、特に印象に残ったのは「死の鉄道」とも呼ばれる泰緬鉄道を通して感じた恐怖感です。泰緬鉄道はタイとミャンマーを結ぶ鉄道で、第二次世界大戦中に日本軍がたったの1年で過酷な環境下で建設、運行させ、多くの死者を出してしまったという過去があります。当時捕虜や労働者であった人々の子孫たちが同じ場にいる状況に、日本軍の子孫である私はどうすればいいのか実際に現地に行ったことで、とても考えさせられました。

今思い返してもゾッとするような感覚が残っており、過去の戦争であっても他人事ではないことを強く感じた瞬間でした。また、戦争は戦って命を落とす人だけでなく、その時代に生きるすべての人が犠牲になり、尊い命を奪っていく恐ろしいものであることをひしひしと感じました。

世界中には未だ戦争や内紛は起こっており、今この瞬間にも命を落としている人がいるかもしれません。また戦争だけでなく、命が奪われていく悲惨な事態も起こっています。

私は戦争を経験した曾祖母が他界し、戦争を知っている人が私の周りにはもういませんが、「曾祖母の願い」や「平和が当たり前ではない」ことを伝えていかなければならないと強く感じています。

世界中の人々が、安心して眠れて笑い合える世界をつくるためには一人ひとりの優しさとお互いを敬う心が必要不可欠であると思っています。

私たちは今あるこの尊い命を大切に、世界平和実現のために精進し続けていくことを、ここにお鎮まりになる方々をはじめ、すべての戦争犠牲者の御霊にお誓いいたしましょう。

全国から献納された折鶴

大慧會教団

解脱会

円応教

立正佼成会

妙智會教団

福聚の会

救世真教

思親会

松緑神道大和山

＜教団別礼拝＞（右から礼拝順）
教団代表らは荘厳された六角堂の正面で真心を込めて祈りを捧げた

玉光神社

大和教団

善隣教

崇教眞光

―「8.14式典」献納の折鶴―　解脱会御霊地でお炊き上げ　一束ずつ感謝の念を込め

第59回「8・14式典」実行委員会（伊藤徳亮実行委員長）は8月25日午後2時から、埼玉県北本市の解脱会「御霊地」の浄炎場で、同式典に加盟教団会員信徒をはじめ全国から献納された折鶴の「お焚き上げ」を行った。

冒頭、受け入れの解脱会の岡野孝行法嗣（新宗連青年会副委員長）があいさつ。浄炎場について解説後、「コロナ禍では、解脱会の青年リーダーにお焚き上げを委ねていただいた。今年は、青年代表が集まることができた。今後いかなることがあろうとも、先師先達の『8・14式典』への思いや意をしっかり汲んで、またそれを守り、皆さまもお役目を担ってもらいたい」と述べた。

続いて、司会の隈元正樹・新宗連青年会事務局長が折鶴に同封された手紙の1通を読み上げ紹介した。折鶴が炎に包まれる中、参加4教団（解脱会、松緑神道大和山、妙智會教団、立正佼成会）の青年代表が教団別礼拝を行った（写真）。この後、各教団の青年代表は平和への祈りが込められた折鶴を一束一束、感謝の念を捧げ、丁寧に炎へ入れた。

伊藤徳亮実行委員長（新日本宗教青年会関東連盟委員長、妙智會教団）が閉会あいさつ述べ、最後に参列者全員で黙祷を捧げた。